

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370080

研究課題名(和文)ジークフリート・クラカウアーの思想史的意義の解明

研究課題名(英文)Elucidation of the significance of Siegfried Kracauer in the history of thought

研究代表者

荻野 雄(Ogino, Takeshi)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50293981

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、クラカウアーの思想史的意義を解明するため、クラカウアーは1920年代半ばから死まで一貫した思考動機、つまりラティオに対する批判とその支配からの脱却への憧憬に従っていたこと、彼の思想は著名な美術史家アビ・ヴァールブルクと深い親和性を有しており、それゆえに彼は第二次世界大戦中ヴァールブルク学派とナチのプロパガンダに対する共同の戦線を形成したこと、またクラカウアーの映画理論はドゥルーズのそれと大きく重なっており、今日の映画理論にとって多大な重要性を有していることを示した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to elucidate the significance of Siegfried Kracauer's philosophy in the history of western thought. To attain this purpose this study shows that from the mid-1920s to his death Kracauer was consistently moved by one single motive, that is the criticism of the ratio and the longing for escaping from its regime, that his thought had a deep affinity with the view of the famous art historian Aby Warburg and therefore he could draw up the common battle line against the Nazi propaganda strategy with the Warburg School during the World War , that his theory of film has many points of resemblance to the philosophy of cinema of Gill Deleuze in Cinema1 and Cinema 2, so that Kracauer's film philosophy has the great importance for the film theory today.

研究分野：西洋思想史

キーワード：クラカウアー メディア理論 ヴァールブルク学派

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の対象であるジークフリート・クラカウアー (1889~1966) は、ドイツ出身のユダヤ系の文化哲学者である。ワイマール時代クラカウアーは、フランクフルト新聞の学芸欄執筆者として名を馳せ、またベンヤミンやカフカの重要性をいち早く洞察した論説を発表するなど、ドイツ思想史に大きな足跡を残した。ナチズムを逃れて渡ったアメリカでも、クラカウアーは『カリガリからヒトラーへ』(1947) や『映画の理論』(1960) などの著作によって、同地でのメディア理論の確立に多大な貢献を果たした。

(2) こうした先駆性や与えた影響の大きさにもかかわらず、クラカウアーは没後長い間忘れられた存在であった。だがこの状況は、近年大きく変化しつつある。研究書が陸續と発表されるなど、世界的には「クラカウアー・ルネサンス」と表現してよい状況が現われているのである。そうした中日本では、クラカウアーの思想に深く立ち入った研究は、今日までほとんど行われてこなかった。本研究は、日本の思想史研究のこの重大な欠損を埋めるため、研究代表者のこれまでの研究の蓄積に基づいて、クラカウアーの西洋思想史上の重要性を闡明する試みである。

2. 研究の目的

(1) 本研究は次の二点を目的とする。第一は、クラカウアーの思考の根源的なモチーフを剔抉し、彼の思想的生涯はこの思考動機のダイナミックな展開であることを明らかにすることである。クラカウアーは次々と新たな対象や方法に取り組んでいったため、その思想的全体像が掴みにくく、そのことが思想史におけるクラカウアー受容の障害となっていた。実際にはクラカウアーは、抽象化し操作する知性 (ratio) の支配という近代批判の視角と、そこからの救済への憧憬とを生涯の思考の根本動機としていたのであり、ワイマール共和国の混乱やナチズムの台頭という現実にも、彼はこうした立場から対決したのだった。ただし救済に関する当初の神学的な超越志向の観念は、時代との格闘の中で、1920年代半ば以降は啓蒙的で内在的な姿勢へと発展していった。このように彼の思想的立場の基本的な一貫性とその発展過程とを抽出することで、クラカウアーを思想史上に的確に位置づけることが可能となるだろう。

(2) 第二は、クラカウアーの思想的立場とヴァールブルク学派 (ヴァールブルク、パノフスキー) の思考枠組との大きな重なり、およびクラカウアーの『映画の理論』とドゥルーズの『シネマ1・2』との親近性を明らかにすることである。それによって、クラカウアー思想のいわば地下水脈的な共鳴関係の広

がりや露わにされる。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者のこれまでの研究成果を踏まえ、かつ新たに出版された資料や研究文献なども利用して、クラカウアーのテキストから秘められた思考モチーフを露呈させる。またクラカウアーとの比較のため、ヴァールブルク学派の思想とドゥルーズの映画理論を整理する。

(2) こうした考察の過程で、クラカウアーのかつての弟子であり後に彼を厳しく批判したアドルノよりも、また一般にフランクフルト学派よりも、クラカウアーの方がナチズムの本質および脅威を遥かに正確に洞察していたことが浮き彫りにされる。そのことにより、フランクフルト学派周辺の亜流思想家という、一般に広まったクラカウアーに関する誤ったイメージも払拭される。

4. 研究成果

(1) クラカウアーの思考の一貫性と内的展開とを明らかにするには、ワイマール時代の彼の思想とアメリカ時代のそれとを媒介している、パリ亡命時代 (1933~1941) に光を当てる必要がある。この時代のクラカウアーの思考は世界的に見ても研究の手薄な、彼の思想展開のいわばミッシング・リンクとなっているのである。この時期の特に重要な作品が、『オッフェンバックと彼の時代のパリ』(1937) であり、本研究はこの著作に関して三つのことを明らかにした。第一は、この作品はしばしばそう考えられているようなオッフェンバックの単なる伝記ではなく、ラティオ批判の立場からのクラカウアーのナチズムとの対決の試みだ、ということである。クラカウアーはワイマール時代の『サラリーマン』(1930) で、20年代半ばからのアメリカ型の経営合理化 (ラティオの論理の支配) のため、現在ドイツの中間層は経済的に急速に没落しつつあると指摘していた。しかし中間層は現実を受け入れず、「娯楽産業」などで非現実的な夢に耽っていた。このようにラティオの論理の蔓延を媒介として精神的に退行した彼らは、既成の政治勢力によって代表されず、それらから見捨てられていたこともあり、自身に幻想の希望を約束する過激なアウトサイダー的政治運動に魅了されやすいことを、クラカウアーは危惧したのだった。クラカウアーにとってナチズムの勝利の大きな要因は、こうしたドイツの大衆の現実逃避傾向にこそあった。クラカウアーのオッフェンバック論は、こうした同時代認識を背景に、フランス第二帝政を第三帝国の先駆として読み解いた作品である。クラカウアーによれば、二月革命の熱狂の後フランスのブルジョアジーは、プロレタリアートの勢力拡大

を恐れて共和国を裏切ったのであり、この裏切りという現実から目を背けたため、彼らは幻想に魅了されやすくなった。ナポレオンという名のアウラを掲げて皇帝となったナポレオン3世は、幻想に逃避しがちなフランスの大衆に歓喜と栄光を約束し、豪華な宮廷生活を誇示する芝居がかった政治を展開して、独裁制を維持した。クラカウアーによれば、当時オッフェンバックのオペレッタが席卷したのは、社会自身がオペレッタじみていたからである。このように第二帝政の基礎を描き出すクラカウアーは、それを通じて第三帝国存立の秘密をも暴露していたのであり、また第二帝政の喜劇的性格を強調することで、ヒトラーから権威を剥ぎ取ること、そうしてドイツ国民を偉大さの虚構から覚醒させることをも、彼は目論んでいたのであった。

(2) その後クラカウアーは、現象学者シュッツが激賞した『全体主義的プロパガンダ』(1938)と、アメリカ移住後に書かれた『プロパガンダとナチ戦争映画』(1942)で、ナチズムを世界大戦の経験に憑かれた反逆者たちの政治運動と規定したうえで、戦争遂行に必要な総動員体制を樹立するためにナチズムは、もともと現実から遊離していたドイツの大衆の精神を絶えざるプロパガンダによっていっそう退行させながら、彼らをネーションの幻影に引き入れている、と論じた。そして『カリガリからヒトラー』(1947)では彼は、ワイマール時代のドイツ国民が深層心理的には現実=共和国を拒絶し、それへの反抗と幻想への従属の準備を整えていったことを、映画史から読み解いていった。このように1920年代末から40年代末までのクラカウアーは、近代の病弊診断という自身の一貫した立場から、ナチズムとの対決を継続的に遂行したのである。

(3) 第二は、クラカウアーのナチズム理解は、アドルノそしてフランクフルト学派のそれより遙かに現在性を有する、ということである。アドルノがクラカウアーのオッフェンバック論を酷評し、ベンヤミンにクラカウアーとは絶縁すべきかもしれないと書き送ったことは、よく知られている。そうした批判を展開する際にアドルノが真理として前提していたのは、ナチズムは「独占資本主義段階の西洋列強の反共産主義的方針におけるチェスの駒」だという見解であった。だが、当時フランクフルト学派が共有していたこの正統マルクス主義的ナチズム観に対して、現代にも不気味な共鳴を見出すクラカウアーのナチズム観の洞察力の鋭さが際立っていることは、明らかであろう。さらに、アドルノが1938年9月の時点でもクラカウアーに、「戦争は起きない、もしも起きれば経験論の理論に対する勝利になってしまう」と告げていること、そして戦争勃発後に執筆された『啓蒙の弁証法』が、クラカウアーのワイ

マール中期以後の立場を「受け継いだ」ものであることを考えるなら、少なくとも同時代診断や社会批判に関する限り、クラカウアーとフランクフルト学派の一般に広まっている影響関係の方向の想定、また思想的ポテンシャルの多寡の想定は、根底的な再考が求められるだろう。

(4) 第三は、クラカウアーのオッフェンバック論は、初期の神学的で超越志向の「救済」イメージより近代世界にいっそうふさわしい、啓蒙的で内在的な新たなそれをおぼろげながらも浮かび上がらせている、ということである。クラカウアーにとってオッフェンバックは、陶酔を創り出すことで第二帝政に貢献していただけではなかった。彼の皮肉なオペレッタは、第二帝政で社会批判を遂行したほとんど唯一の媒体であったのみならず、超越を欠き内在に一元化された世界の中で絶えず新たな意味生成の可能性、新しい始まりを見出していくことこそが、クラカウアーによればオッフェンバックの「理念」なのであった。この理念はニーチェの永劫回帰説と相似しており、それゆえ「ニーチェは余りに深く形而上学区的思弁の中に入り込んでいたので、オッフェンバックの表面に対する感覚を評価せざるをえなかった」と、クラカウアーは書いている。このオッフェンバックの理念が、やがて、クラカウアーの考える「映画の使命」へと展開されていったのだった。

(5) このようにクラカウアーは、ワイマール中期から晩年まで彼独自の思考動機を発展させつつ、一貫してその立場から時代に対峙したオリジナルな思想家であるが、同時に彼は、当時の重要な思想潮流とも秘められたしかし強い共鳴関係にあった。そうした潮流とはヴァールブルク学派であり、同学派とクラカウアーとの深い繋がりを露わにして、こうした点からも彼は西洋思想史上重要な存在であることを示したことも、本研究の成果の一つである。まず、ヴァールブルク学派の鼻祖である美術史家アビ・ヴァールブルク(1866~1929)の思考枠組は、1920年代以降のクラカウアーの思想と深い親縁性を有していた。ヴァールブルクは、人間存在の基底にディオニソス的なものがうごめいていることを見出したうえで、そこに含まれる人間にとっての解放的ポテンシャルは近代合理主義によって抹殺されていること、第一次世界大戦中の国家やファシズムは、プロパガンダを通じて歪んだ仕方人間はこのデモニッシュな次元を動員していることを指摘した。クラカウアーのみならずベンヤミンも、こうしたヴァールブルク、また彼の問題設定を受け継いだヴァールブルク学派に強い共感を示していたのであり、ベンヤミンは1928年にクラカウアーに、ヴァールブルク学派はいよいよ我々にとって重要になりつつあると書き送っている。一般には見過ごされてい

るが、クラカウアー、ベンヤミン、ヴァールブルク学派は、当時密かな思想的星座を描いていたのである。

(6) クラカウアーとヴァールブルク学派とのこの思想的な繋がり、クラカウアーのアメリカ移住以後に表面化した。すなわち、アメリカ到着後クラカウアーは直ちに、ヴァールブルクから強い影響を受けた美術史家で精神分析家のエルンスト・クリスが主宰する、ナチ・プロパガンダ分析プロジェクトに合流したのである。クリスはまた、後にヴァールブルク研究所所長となるゴンブリッチにイギリスでのナチのラジオプロパガンダ分析の指揮を委ねていたから、クラカウアーは、こうしたナチ・プロパガンダに対するヴァールブルク学派の共同戦線の一翼を担っていたと言える。ただし、クラカウアーのプロパガンダ分析には、ヴァールブルク学派の枠組には収まらない観点も含まれていた。例えば、プロパガンダを「虚構の現実化」と捉えるヴァールブルク学派と共通の観点以外に、クラカウアーはナチ・プロパガンダにおける「現実の虚構化」効果も指摘していた。レニ・リーフェンシュタールの「意志の勝利」は、ドキュメンタリーのために現実を演出することで、現実自身をスペクタクルなショー（虚構）の中に引き入れようとしているのである。

(7) しかしクラカウアーが最も深く関わったヴァールブルク学派の研究者は、エルヴィン・パノフスキー（1892～1968）であった。クラカウアーとこのイコノロジーの代表的学者とは、1941年から1966年のクラカウアーの死まで、相互に深く理解し合いながら交流を続けた。特に二人を接近させたもの、それは映画に対する共通の関心であった。クラカウアーのナチズム映画論をパノフスキーは激賞し、「あなたの考察のおかげで、我々の車を引きずりまわしてきたナチの馬を、今度は我々が引きずりまわしてやることができる」と、書き送っている。そしてクラカウアーも、パノフスキーの有名な映画論「動画における様式と素材」（1936）に、深い共感を示した。このエッセイでパノフスキーは、映画の魅力の真髄はイメージの運動にこそある、と指摘する。パノフスキーによれば、映画におけるイメージの運動とは固定された視点から捉えられたそれではなく、「空間のダイナミズム化」によって、つまりモンタージュや可動式カメラによって強調された、言い換えれば運動する実体から解放された運動である。さらにその運動においては「時間の空間化」が見られる、とパノフスキーは言う。「時間の空間化」とは、本質的に時間的である音楽が、空間中の移動としてのイメージの運動と一体化することを意味する。音楽はベルクソンにとって「持続」の傑出した媒体であったから、パノフスキーの考えるイメージの運動とは、ベルクソンの言う持続

（開かれた全体、時間）の表われでもある運動、ドゥルーズの言う「動く断面図」としての運動であるだろう。このようなイメージの運動（ドゥルーズの用語では「運動イメージ」）こそが「物理的現実」であり、日常的には不可視であるそれを映画は初めて露わにし、それをこそ自身の素材とするのである。そして映画監督は、この素材から様式を取り出す。クラカウアーは、こうしたパノフスキーの映画観のうちに自身の映画理論との深い親縁者を見出し、そのため「物理的現実」というパノフスキーの用語を『映画の理論』のキーワードの一つとし、また副題（物理的現実の救済）にも採用したのである。

(8) 今見たとおり、パノフスキーの映画エッセイはジル・ドゥルーズ（1925～1975）の映画理論との一定の親近性を示しており、クラカウアーもパノフスキーの映画観に自身の映画理論との共通性を認めていたから、クラカウアーの映画論と『シネマ1・2』におけるドゥルーズの映画理論とを比較することは意義があるだろう。確かにドゥルーズは、『シネマ1・2』で一箇所だけクラカウアーに言及しているに過ぎない。しかし両者の映画理論は、戦後の主流である言語をモデルとする記号論によるアプローチとは対蹠的に、映画のイメージを何かの「複製」、「表象」としてではなく「物理的現実」そのものとして捉え、そして映画監督の課題は、この物理的現実を探索してそこから様々な有意味なまとまり（非言語的な記号）を彫り出すことであると考えている点で、志向を同じくしているのである。いっそう重要なのは、戦後世界診断とそうした世界の中での映画の役割とに関する、二人の見解の類似性である。クラカウアーは戦後の世界を、包括的な意味を信じるのが不可能になり、イデオロギーの瓦礫の中にただ抽象性（ラティオ）だけが蔓延している世界であると考えた。ドゥルーズもまたそれを、ベルクソンの言う「感覚運動図式」を通じての人間と世界との有機的な結合が崩壊し、目的のない彷徨やクリシェに満ちた世界として描き出していた。ドゥルーズによれば、こうした世界の中で映画は、時間を直接に表わす「ガラス記号」（差異化としての時間の根源の顕現）、「時間記号」（現働的現在と潜在的過去の混交）を抽出する方向に発展しているが、この展開は重要である。なぜならそれらの記号はまた「思惟記号」として、観客に分断されたイメージの間の全く思いがけない接続を、再び世界と新たな仕方で繋がる可能性を思考させるからである。このようにして映画は、我々の世界への信頼を回復させる機能を果たすと、ドゥルーズは言う。同様にクラカウアーも、映画の使命は観客の「自我」を崩落させ、不随意的な記憶を掘り起こして、彼らを全く新しい生の可能性に達着させることであると見ており、こうした使命を果たすとき映画は、「世界を我々の家に

する」と主張する。このようにクラカウアーの映画理論とドゥルーズのそれとは、これまで全く指摘されたことはないが、おそらくは同質的な映画経験に根ざした濃密な親和性を示している。クラカウアーの思想は現代思想の地平でも、顧みられるべき価値を有しているのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

荻野 雄、クラカウアーとヴァールブルク学派(1) クラカウアーとアビ・ヴァールブルク、京都教育大学紀要、査読無、130巻、2017、1-16

荻野 雄、クラカウアーとヴァールブルク学派(2) クラカウアーとエルヴィン・パノフスキー、京都教育大学紀要、査読無、130巻、2017、17-34

荻野 雄、喜劇としての独裁 クラカウアーの『ジャック・オフエンバックと彼の時代のパリ』、京都教育大学紀要、査読無、128巻、2016、1-19

6. 研究組織

(1)研究代表者

荻野 雄 (OGINO, Takeshi)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：50293981